日本青年団新聞

Youth Post

2021 vol. 4

106巻第3号　発行2021年8月1日

編集・発行 日本青年団協議会

〒160-0013
東京都新宿霞ヶ丘町4-1日本青年館5階
TEL 03-6452-9025　FAX 03-6452-9026
MAIL dan_news@dan.or.jp
Web　https://www.dan.or.jp

デービッドさんが働く珠洲市役所

天皇皇后両陛下が巡幸された珠洲ビーチホテル

水平線が一望できる寄り道パーキング雲津

仲良く撮影する若山青年団員たち

p2-3 … Action
団長はアメリカ・ミネソタ州出身
（石川県珠洲市若山町）
酪農の魅力、後輩へ（北海道中川郡池田町）
マップを携え歩く（静岡県浜松市北区引佐町）
p4-5 … FOCUS
青年団とSDGs　～国境を越えて～
p6 …… リーダーと語る
吉永麻実氏（耕人社）
p7 …… 青年団ってどんなところ？
思いをカタチにし、つながりを築く
（大分県連合青年団）
p8 …… OPINION、イケ団、はらぺこ青年団

「Youth Post・ユースポスト」とは青年の活動や思いが全国に届くことを願って、Youth・ユース（青年）とPost・ポスト（郵便物）を組み合わせたものです。
本紙は、青年や青年団が全国でいきいきと活躍する姿を伝える日本青年団協議会の機関紙・広報紙です。

団長はアメリカ・ミネソタ州出身

～新たな視点で豊かな地域へ～（石川県珠洲市若山町）

三方を海に囲まれた能登半島の最先端に位置する珠洲市、その中でも山間部の豊かな自然に囲まれた若山町にある**若山青年団**（以下、青年団）で、アメリカ・ミネソタ州出身のハンソン・ロバート・デービッドさん（25）が今春、団長に就任した。石川県団の歴史において国外に国籍を持ち、日本とは異なる文化の下で生活してきた青年が、団長に就任した例はこれまで確認されていない。デービッドさんは2018年、語学指導等を行う外国青年招致事業（外務省）に応募し、国際交流員として珠洲市に配属された。現在は観光交流課で翻訳や通訳、英語の指導等、地域に根付く仕事を通じて日本と世界をつなぐ役割を担っている。

焼きそばづくりに挑戦するデービッドさん

約1，600人が暮らす若山町では、少子高齢化が進み、人口の半数が65歳以上だ。デービッドさんは移住した当時、若者の多い都市部に比べ、高齢者の多い里山での生活は戸惑いの連続だった。歩いてすぐ行ける距離にコンビニもなく、はじめは不便さを感じていたが、だんだんと豊富な自然や地域のあたたかい人柄に魅了されていった。

コロナ禍により現在は活動を制限しているが、青年団では豊作を願う庭祭りで屋台を出店したり、地域の清掃活動を行ったりしている。前会長からのつよい推薦のもと、団長に就任したデービッドさんは「せっかく団長になったのでアメリカ式のバーベキューなど文化を広げていきたい」と意気込む。珠洲市青年団協議会（以下、市青協）前会長の岡田久司（ひさし）監事（31）によると、昨年、市青協主催でeスポーツ大会を行ったとき、デービッドさんの案で行ったボードゲームが大好評だった。ゲームが楽しかったから市青協に入団した人もいる。市青協の豊平慶彦（とよひら よしひこ）会長（31）は「国籍が違う人が団長をしてくれることによってみんなに与える刺激は大きい。私たちと違う目線や持っているものを活かしていろいろな活動を頑張ってほしい」と語る。

石川県青年団協議会の越野慎平副会長（36）は「団長であることをまず楽しんでほしい。楽しんでくれたら若山の活力につながるだろうし、ひいては珠洲市全体の活力につながる」と想いを寄せる。石川県に残る豊かな伝統芸能と、持ち込まれる斬新なアイデア、能登から全世界を見渡していく。

お問合せ：石川県青年団協議会　電話番号：076-252-7178

2018年の庭祭り。青年団で地域の人に焼きそばをふるまう

庭祭りに参加した子どもたちと笑顔で

酪農の魅力、後輩へ

～地元高校に酪農漫画を寄贈～

（北海道中川郡池田町）

十勝平野の東側に位置し、酪農や畑作が盛んな池田町の**大森青年団**は4月14日、「鋼の錬金術師」などでお馴染み荒川弘さん作の酪農漫画「百姓貴族」全6巻を、地元の池田高等学校に寄贈した。

青年団員らは2月ごろ、地元の農業普及改良センターの方から「十勝管内※の学校に酪農関係の漫画を贈り酪農に興味をもってもらう」ためのクラウドファンディングがあることを耳にする。普段は青年団が所有する畑で、団員がカボチャなどの野菜を育て収穫しながら農作業の技術を学び、その野菜を販売したお金で一杯やる等、仲間同士の交流を深める活動を行ってきた大森青年団。2020年はコロナ禍で作物の作付や収穫、販売以外の活動が十分にできず財政的に余裕があった。そこで余った活動費をクラウドファンディングで漫画に換え、地元高校に贈ろうと一致団結。投資の返礼品として漫画を受け取り、池田高校への寄贈が実現した。自身も酪農を営む団長の藤野慎治さん（35）は、「漫画を通じて農業や酪農の面白さ、大変さ、やりがいなどを知ってもらえたら」と、池田町の第一次産業の未来を担う後輩が現れることを心待ちにしている。

漫画を直接手渡し、生徒からは感謝の声が

（写真提供：池田町）

お問合せ：北海道青年団体協議会　メールアドレス：doseikyo@ybb.ne.jp　　※管内：他地域での県のような行政単位のこと

マップを携え、歩く

～地図でつなぐ未来～

（静岡県浜松市北区引佐町）

いなさ青年団は、コロナ禍で活動を自粛しながらも、地域の名所や名物を紹介する「いなさマップ」を作成した。きっかけは「町の目印が分かる地図があった方が良い」という町の人の声だ。NHK大河ドラマ「おんな城主直虎」で一躍有名になった引佐町は、中山間地域に位置し、緑が一面に広がる景色故に、町外から来た人は迷子になる人が多い。いなさ青年団はこれまで約20名の団員で菊芋掘り体験やお茶摘みBBQ、婚活イベントなど活発に活動してきたが、コロナ禍の煽りを受けて、今年度の団員は9名にまで減ってしまった。それでもできることをやろうとマップを作成。始めてみたところ、文化施設や飲食店などの取材を通じて、商工会や観光協会、地元住民と関係性を築くことができた。完成したマップを目にした町の人からは、「自分の字も見ることができて嬉しい」という声も寄せられ、このマップは、浜松市市民活動団体表彰で北区長賞に選ばれた。長峯岳団長（45）は、「〝できる人が、できる時に、できることを、できる範囲で楽しく活動する〟ことをモットーに活動してきた。これからも地域を盛り上げていきたい」と明るく話す。いなさ青年団は地元の魅力を発信し続けていく。

いなさマップを持って区長訪問

お問合せ：静岡県青年団連絡協議会　TEL：054-254-2006

青年団とSDGs

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

昨今、持続可能な社会をめざすための17項目のターゲット（ＳＤＧｓ）を実践することが社会的に注視されています。しかし、ＳＤＧｓとして注視される以前から、青年団はＳＤＧｓに通じる活動を続けていました。そこで本号から、青年団活動とＳＤＧｓについて取り上げていきます。今回は、国際交流をテーマに今まで日本青年団協議会（日青協）が行ってきた交流を振り返りながら各地の取り組みをご紹介いたします。

国境を越えて

１９５９年に日青協の「国際交流に関する基本的な態度」が示されています。私たち青年団は、思想、宗教、党派、国情、人種によって差別することがあってはならないとしています。国際化が進む今だからこそ、あらためてこの意味を学び合いましょう。日青協は中国、朝鮮民主主義人民共和国（共和国）、韓国の東アジア諸国と相互交流を中心に行ってきました。発足以来、「二度と銃を取らない」という決意に示された願いは、今なお脈々と私たちに引き継がれています。青年の生活を高め、世界の平和を求める私たちは、国際情勢にとらわれない青年同士の交流を通じて、相互理解を深めていきます。

◆中国青年との交流

１９５６年、中華全国青年連合会（全青連）と「日中両国青年の不戦の誓い」をたてました。戦時中、青年を戦争に送り出したことを悔い、この誓いをたてています。お互いの国を往来する定期交流のほか、２０１９年で28回目を迎えた植林訪中団は、沙漠を森に変え、現在では観光地となり地元青年の雇用にもつながるなど、大きな変化をもたらしています。

沙漠化した土地から黄砂は海を越え、日本にもやってきます。およそ30年続く中国各地の植林活動により沙漠は森となり、現在では小動物も暮らせるようになりました。

◆共和国青年との交流

１９７６年の日青協定期大会で、北信越５県から「日朝青年の友好交流の促進に関する件」が上程され、満場一致。２年後には初の訪朝代表団を派遣し、合議書をかわしました。その後、相互交流のほか世界学生祭典の準備に尽力、１９９４年に共和国北部を襲った水害を受け、他団体と連携しながら約61トンのお米を寄付しました。国際情勢により、お互いの往来が難しい状況が続いていますが、現在も在日本朝鮮青年同盟（朝青同）と地域の青年同士の交流は続いています。

地域の青年団から声が上がり、共和国をの交流が始まりました。上程された年と同年、全国青年大会要項に記載された「日本国籍を有する者」は、消え、国籍条項は撤廃されました。

◆韓国青年との交流

慰安婦問題が関心を集めた１９９５年、ソウルで日青協理事会を実施し「不戦の誓い」をたてました。中央青少年団体連絡協議会（中青連）の解散に伴い、中青連が行っていた相互交流を引き継ぎました。２０１５年に韓国青少年団体協議会（韓青協）と「日韓青少年指導者国際交流に関する協定書」を調印。両国の往来による交流を続けています。その他にも、両国の青少年教育に関する制度や社会教育団体に関する情報交換も行っています。

北方領土の早期返還をめざして
「四島（しま）の未来　心かよわせ　返還へ」
2月7日は北方領土の日です
北方領土返還要求のシンボルマークです
独立行政法人 北方領土問題対策協会
〒110-0014 東京都台東区北上野1-9-12住友不動産上野ビル9F
電話 03-3843-3630　FAX 03-3843-3631
URL http://www.hoppou.go.jp

▶「砂漠」と「沙漠」の違い
「砂漠」とは「砂のサバク」をさしますが、中国ではほかにも「礫のサバク」や「土のサバク」も含めた意味で「沙漠」と表現しています。
中国との交流を深めるために、日青協では「沙漠」という語を用いています。

地域の青年たちは、次世代を担う更に若い世代との関わりを大切にしています。農業体験や様々な分野の学習会は、自分たちだけではなく、子どもたちの未来もつくっています。

◆地域からつながる

（愛知県青年団協議会）

２００９年度の定期大会で加盟団間の交流をしていくことを決め、何かできないかと始まった在日朝鮮人との交流。はじめは、愛知県朝鮮青年同盟と合同で「ガチンコ交流運動会」を安城市の小学校で行いました。定番種目に加え、靴飛ばしやハンディキャップボール投げ（利き腕でない方で投げる）など、両国の青年が笑いながら勝利をめざし、本気で身体を動かし汗を流しました。この交流をきっかけにお互いの連絡先を交換し、自らの事業に招待し合うようになりました。

現在は、事業のほか、参加や焼肉を一緒に食べに行くなど、様々な場面で友好を深めています。オンライン事業の案内を送りあうようになった熊谷啓之（ひろゆき）会長（36）は、「コロナ禍で会うのは難しくなっているが、情勢にとらわれず今後も交流をしていきたい」と語ります。

お問合せ　愛知県青年団協議会
TEL　052-221-6003

活動の合間に共に食卓を囲む

ものさしを見つける

大石　精一

仕事柄、毎年多くの青年海外協力隊員ＯＢ・ＯＧの方とお会いする機会があります。ザンビアというアフリカの国で陶芸の指導をしていたあるＯＧは、脳梗塞で入院した大好きな祖母が「家族に迷惑をかけてしまうので、早く死にたい」とつぶやくのを耳にしたことを聞いた彼女は、その後看護学校に再入学しました。現在は看護師として離島で高齢者のお世話をしています。

また、つい最近東ティモールから帰国したＯＢと話をする機会がありました。彼は学生時代ブラジルのスラム街でのボランティア経験もあるそうです。現在は日本の山谷地区で生活困窮者のお世話をしていますが「世界を回ってみて、本当の不幸は日本にあった」そうです。山谷地区の生活困窮者に何を与えても、ブラジルや東ティモールで見たあの笑顔を見せてくれることはないだろうと語っていました。

青年海外協力隊は開発途上国と呼ばれる異国の中で、現地の人と共に暮らします。日本では当たり前に感じていた価値観が、全く通用しないことも少なくありません。「経済」「テクノロジー」というものさしを使えば、日本は開発途上国より優れています。しかし、「家族の絆」「充実した人生」というものさしを使うと、日本は貧しく遅れた国に映ります。価値観が固まってしまったシニアではなく「青年」だからこそ至る考え方もあります。日本の中で、ネットで自分の考えに賛同してくれる相手だけを探していたのでは得られない、別のものさしを得るためにも、国際交流を大切にしてほしいと思います。

プロフィール

おおいし・せいいち。

大学卒業後、東京都葛飾区内の遺跡発掘調査に従事。青年海外協力隊員（考古学）として平成６年より東欧・ブルガリアで２年間活動。

経済開発を優先するため破壊の危機に面しているギリシャ、ローマ時代等の遺跡の緊急発掘調査に従事。帰国後、（一社）協力隊を育てる会入職。民間の立場からJICAが実施する青年海外協力隊事業の理解と支援を呼び掛けている。現在、一般社団法人協力隊を育てる会事務局長を務める。

冊子「生きる」と「震災パネル」貸し出し中！

災害大国といわれる日本に暮らす私たちは、様々な災害に見舞われてきました。その被害の実相を当事者たちの言葉で伝える冊子「生きる」の発行は、今年で６冊目となりました。また、展示に便利な「震災パネル」も貸し出しています。

ここに綴られた記録は、遠い町の他人事ではなく、あなたに明日訪れる未来かもしれない。いつか必ず起こる災害から自分自身や大切な仲間、家族、まだ見ぬ誰かを守るために、是非ご活用ください。

ご利用は裏面のQRコードを読み取り、日青協Webサイトから

日青協
Facebookは
コチラ↓

取材の裏話や日青協の取り組みについて発信しています。ぜひご覧ください！

▼耕人舎　吉永　麻実　氏

よしなが　まみ。熊本県菊陽町出身。2009年から2年間、JICA青年海外協力隊としてアフリカのマダガスカル共和国に派遣。帰国後は国際協力NPOを経て、熊本県人吉市や球磨郡にて古民家レストランをはじめ食を通じた農村活性やグリーンツーリズム推進に携わる。現在は熊本県水俣市在住。サラダ玉ねぎの生産販売を柱に「豊かな暮らしを耕す」べく多様な活動を展開。

▼日本青年団協議会会長　中園　謙二

1980年生まれ。岡山県倉敷市在住。2008年に岡山県青年団協議会に入会し、同会長、日本青年団協議会役員を経て2020年より同会長。

リーダーと語る

異文化交流が視野と器を広げる

この企画では、社会の第一線で活躍する人たちと地域をテーマに語り合い、あらゆる角度から考える。

本号では、海外派遣経験のある青年が現地で様々な洗礼を受け、その経験や考え方を地域活動の場でいかしている方と対談する。

◆異文化体験、海外と熊本

中園　海外派遣でのご経験をお伺いします。

吉永　マダガスカルは国土の8割以上の自然林が失われ、貧困も進んでいます。私は村落開発普及員として、生活環境の改善に取り組みました。例えば薪の消費を減らすために、料理をつくる改良かまどを現地の女性組合と一緒につくったり、栄養価の高い植物の普及に携わりました。一方で、肉を食べる時には動物を捌くところから、また貧しい生活ながら食べ物を分け与えたりなど、日本と少し違う豊かさに出会った経験が、帰国後の活動につながっていきました。段々と「食べることは生きること」という理念が頭に浮かぶようになりました。

中園　今の日本にも必要な豊かさですね。帰国後は熊本で活動されたと伺いましたが？

吉永　生産者側と消費者側をつなぐ仕事がしたいと思っていたとき、機会があり球磨郡の郷土料理研究家に会いに行きました。そのご縁や暖かさに感銘を受け、3年間弟子入りのような形で働きました。マダガスカルでは言葉も文化も分からない中で人間関係や物事の調整、また地域ごとの独自ルールに悶々としましたが、人吉球磨でも一緒でした（笑）

中園　意外な共通点ですね。

◆国際経験が引き出しを増やす

中園　あちこちでの経験をふまえ、改めて見つけた地元の魅力について教えてください。

吉永　地域の生活の中で育まれた食文化の知恵や工夫ですね、柚がたくさんあるのでこう加工しようとか。地元の人が魅力に思っていないことを、私が魅力だと思って「これ良いですね」とイベント化したら「これは良いものだったんだ」という確かな自信につながったこともあります。

価値観は人それぞれで、魅力を誰かに伝えようとしても全員には伝わりません。「郷に入っては郷に従え」の自分自身の思いややりたいことを温め、自分がこれをやりたいと公言していくことが、無理に不特定多数を相手にするより仲間の輪を引き寄せるんです。その意味でよそ者って大事ですよね。

中園　地域青年団でも、自分たちは当たり前のことをしているだけ、という意識が強いことが多いんです。青年期に異文化を学ぶ魅力は何だと思われますか。

吉永　マダガスカル語の研修を経て現地に入ったものの、実際は大して話せないし習慣も分からず、「お前は何をしに来たのか」と言われ。そこで地域になじもうと同じ釜の飯を食べたり、ニーズを知ろうとお宅訪問を始めたり。泣いたり笑ったり一緒に農作業をしたりして。人対人の付き合いができるようになり、日本人が来たではなく吉永麻実が来たという関係になると楽しくなってきましたね。その中で地域のニーズや自分がやりたいこと、そして実現するためにはどう根回ししたらいいか、という力を磨いていきました。また、こうでないといけない、という固定観念が取り払われた気がします。いろんな経験をすることが自分の財産になるのでは。

中園　若いうちの引き出しの数が多いと、人生が豊かになりますよね。最後に、コロナ禍でも国際交流をする意義をどうお考えですか。

吉永　食べ物や資源、医療の側面から考えても、地域や国を超えてつながり、自分たちだけでは生きていけない世の中です。自分たちと違う物事に目を向けていく時期ではないですか。

天然ガスがひらく未来

天然ガスは、クリーン性に優れた
環境負荷の少ないエネルギーです。

天然ガスはメタンを主成分とし、不純物を含まないクリーンなエネルギーです。大気汚染や酸性雨、地球温暖化の原因ともいわれる窒素酸化物（NOx）や二酸化炭素（CO_2）の排出量も少なく、環境保全に貢献する、地球にやさしいエネルギーです。

http://www.tokyo-gas.co.jp/

エネルギー・フロンティア TOKYO GAS

青年団って どんなところ？

vol.1

思いをカタチにし、つながりを築く

レクリエーションで交流を深める

真剣な眼差しで日本の文化を体験

大分県連合青年団（大分県豊後大野市）
団長　阿南（あなん）　貴詞（たかし）　氏

私たちにとって青年団とはどんなところなのか―。青年団には様々な業種、年齢、背景をもった青年がいる。本企画では、多様な立場の人に活動を通じて感じた自身の思いや考えについて伺い、あらゆる角度から考える。初回となる今号では大分県連合青年団の阿南貴詞団長に国際交流を通じて感じた思いについて伺った。

◆言葉が通じなくても

新型コロナが国内で流行する少し前の2020年2月22日、内閣府主催の「世界青年の船」で、メキシコとバーレーンの青年約25名を大分県連合青年団が受け入れました。世界青年の船は様々な背景を持つ国外の青年が国際交流を通じ、国際的な視野の獲得やリーダーシップを学ぶ事業です。言葉や文化は異なりますが、少しでも日本の良さを感じてもらいたい気持ちから、言語を用いないレクリエーションや日本の古き良き伝統が残る名所の案内などを考えました。

◆船がつくった つながり

受入は臼杵（うすき）市で行い、現役の青年団だけでなく臼杵市連合青年団のOBや大学生、地域の方々の協力のもと事業当日を迎えました。OBからは企画のアドバイスをいただき、大学生は船に参加した青年たちと仲良くなり、プログラム外でも自発的に行動していました。地域の方は郷土料理のだんご汁の提供や紙雛づくりの体験指導をしてくれました。船に参加した青年たちはどのプログラムも笑顔で楽しんでくれて、今でも時々、私のSNSにメッセージを寄せてくれます。今回の受入では、言語の壁を越えた国外の青年とのつながりだけでなく、青年団内、OB世代、青少年団体、地域、多くの人との縁を感じることができました。

◆仲間がいるから

青年団は様々な立場の人と関わる機会が多いため、一緒に活動するだけでも参考になることが多くいるところです。そのため、今回の受入のように、そうしたつながりが充実した機会にいきてきます。正直に言えば、受入前には他の事業と重なり負担も感じていました。けれども、みんなに助けられ成功させることができました。

青年団は「〇〇してみたい！」という自分の思いを仲間に語ることで、みんなで協力して団員の夢を叶えられる場所だと感じています。時には壁にぶち当たることもありますが、自分の力で解決するには限界だという場合、仲間の存在は大切です。一緒に課題を解決してくれたり、自分では思いつかないアイデアをアドバイスしてくれたりするかもしれません。そのためには日頃から人間関係を築き、交流することが必要だと思います。

毎月17日発売！
月刊 社会教育
創刊1957年。実践家と研究者による市民のための社会教育総合誌。公共施設や教育施設における社会教育はいまどうあるべきか。毎号幅広いテーマで社会教育の在り方を見つめます。
定価：本体741円＋税
旬報社　〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町544 中川ビル4F
TEL03-5579-8973　FAX03-5579-8975　http://www.junposha.com/

日本青年館ホール
私たちは1921年以来、
一貫して日本の社会教育、
全国の青年団を応援しています。
お問合せ ： 株式会社ニッセイまで
「日本青年館ホール」で検索！

OPINION　チガウから生まれる仲間づくり、地域づくり

毎年夏を迎えると、日青協植林訪中団の団員として、植林地（内モンゴル自治区ダラトキ）から中国の首都北京まで夜行寝台列車で旅した夜を思い出す。出発の包頭駅から北京駅までの旅はおよそ12時間。コンパートメント席という現地の青年たちとの限定的な空間と時間を、ほとんど通じない言葉と身振り手振り、そして数知れない乾杯で愉しく過ごした濃密な対話と交流は、互いの理解と信頼を深めた。植林事業の醍醐味の一つであり、何物にも代えがたい大きな財産になっている。

海外との交流が貴重だった当時とは違い、現在では外国籍の方と出会い話す機会は、ＳＮＳやアプリの普及もあって格段に増えた。日本で働く外国人労働者数はここ10年で３倍近くに増え、外国人を見かけない日の方が少ないほどだ。しかしながら私たちは、彼ら彼女らのことを、共に社会をつくる仲間と思えているのだろうか。

今年５月、入管法の改正が見送りとなったのは、その非人道的な扱いや不透明な収用手続きのあり方に対し、国内外で懸念や反対の動きがあったことが大きい。生産人口の減少に際し、新たな働き手として外国人労働者を受け入れるため改正してきた入管法にも関わらず、母国での暮らしが困難であるが故に難民を選択した人たちを排除しようとする改正に矛盾を覚える。国際交流、異文化理解の原点は、時間と空間を共にして得られた相互の理解と信頼ではなかったか。はじめからその機会を排除できるものではない。

私たちはルーツの違う仲間を認められているのか、あらためて自らに問い直してみよう。

IKEDAN イケ団 イケてる青年団員 vol.46

華麗な舞で地域に活気を

岡崎翔平さん（29）（富山県下立（おりたて）青年団団長）

古くから獅子舞が継承される黒部市に生まれた岡崎さん。下立青年団が獅子舞で町を練り歩く姿を見て育ってきた岡崎さんにとって、青年団に「入団することは「自然なこと」だった。

入団当時は高校生で、獅子舞の踊りを覚えるのに苦労もしたが、入団してから今年で11年目を迎え、団長となった。団の仲間は小学校からの同級生も多く、何でも言いあえる関係性を築いている。今はコロナであまり行けないが、活動後の仲間と飲むお酒も楽しみのひとつだ。

活動の中で、深く思い出に残っている出来事のひとつが、８年前に出場した全国青年大会の郷土芸能の部で、最優秀賞を受賞したことである。練習の成果が実った瞬間だった。仲間とともに喜びを分かち合ったあの時は今でも活力になっている。昨年は、獅子舞で民家をまわる秋祭りもコロナの影響で中止となってしまったものの、「いまの時代にあったやり方でやっていきたい」と活動に対して前向きだ。獅子舞のパワフルな魅力と岡崎さんのまぶしい笑顔が地域を明るく照らす。

コロナに負けずに
がんばらんまいけ！
（がんばろう）

編集後記

メガスポーツイベントの開催を目前に、日本青年館の周辺では非日常感が漂っています。見えないものへの恐怖から何かを避けたり近づかないことをやめ、見えないものを見えるようにする「分析」が、人間としての器を大きくするのかもしれません。知らないものを拒絶する人間より、色々なものを受け入れられる面白味のある人間でありたい。（う）

NISSEIKYO

最新の情報はこちら
https://dan.or.jp

はらぺこ青年団

地元の名物を支局員青年団エピソードとあわせてご紹介。

高知県会館から近い、県団役員行きつけの鶏料理屋「かし〇（わ）」。

座敷は地域の団体客でいつも満席だ。高知特産のゆずぽんずと相性抜群の鶏のタタキの名物はもちろん、豪快に焼き上げるセセリは匂いだけで涎が出てきてしまう。店員の笑顔につられて「もう一品」と頼むものの、いつの間にか頼んだ記憶がない料理でテーブルがいっぱいに。事業の話を肴に食べれば高揚感につつまれ、何度目かわからない乾杯をする。今日も楽しい夜が続く。

森岡千晴（高知県青年団協議会）支局員より投稿